

気を落とさずに絶えず祈れ

創世記 32 : 23 - 32

ルカによる福音書 18 : 1 - 8



司祭 ヨハネ 井田 泉

2022年10月16日

聖霊降臨後第19主日

聖光教会にて

「イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。」

ルカ 18:1

今日の福音書の中でイエスは言われます。

「気を落とさずに絶えず祈れ」

これを心に留めながら、先ほど朗読された旧約聖書の箇所から、ひとりの祈る人の姿、切に祈った人の姿に目を注いでみましょう。創世記第 32 章、遠い昔のヤコブという人の姿です。

ヤコブは、アブラハムの孫で、イサクとリベカの息子です。ヤコブは双子の弟で、兄はエサウです。ヤコブは若い日に兄エサウから長子の相続権を取り上げ、さらに神の祝福を奪い取って、エサウの憎しみを買いました。エサウの憤りは激しく、ヤコブを殺しかねないほどでした。母リベカは非常に心配して、ヤコブに、しばらく家を離れるように勧めます。ヤコブはこれに従い、母の兄、自分にとっては伯父さんにあたるラバンのもとに身を寄せました。そして 20 年の間そこで家畜の世話をして過ごしました。

ヤコブはラバンの娘、いとこのレアとラケルを妻とし、たくさん子どもを授かりました。やがてヤコブは家族と家畜の群れを連れてラバンのもとから脱走し、遠い道を旅して故郷の地に戻っていきます。

故郷に帰ってくるのは、なつかしくうれしいことのはずなのですが、しかしヤコブは故郷の地に近づけば近づくほど、苦しみが増してきます。20年という長い年月を経ても、兄エサウが今も自分を憎んでいるのではないか、会えば自分を殺そうとするのではないか、という恐怖が募ってくるのです。

ヤコブは先に使いの者を遣わし、エサウに挨拶させました。使いの者は帰ってきて報告しました。

「兄上のエサウさまのところへ行って参りました。兄上様の方でも、あなたを迎えるため、四百人のお供を連れてこちらへおいでになる途中でございます。」創世記 32:7

エサウが400人を率いてこちらへ迫ってくる！ ヤコブは兄エサウが自分を襲うのではないかと恐れました。思い悩んだ末、連れてきている人々を、羊、牛、らくだなどと共に二組に分けました。エサウがやって来て一方の組に攻撃を仕掛けても、残りの組は助かると考えたのです。

しかし恐怖は去りません。ヤコブは叫ぶように祈りました。ここは今日の聖書日課からは省かれていますが、大切な箇所なので読んでみます。

「わたしの父アブラハムの神、わたしの父イサクの神、主よ、あなたはわたしにこう言われました。『あなたは生まれ故郷に

帰りなさい。わたしはあなたに幸いを与える』と。わたしは、あなたが僕に示してくださったすべての慈しみとまことを受けに足りない者です。かつてわたしは、一本の杖を頼りにこのヨルダン川を渡りましたが、今は二組の陣営を持つまでになりました。どうか、兄エサウの手から救ってください。わたしは兄が恐ろしいのです。兄は攻めて来て、わたしをはじめ母も子供も殺すかもしれません。あなたは、かつてこう言われました。『わたしは必ずあなたに幸いを与え、あなたの子孫を海辺の砂のように数えきれないほど多くする』と。」

創世記 32:10-13

このようにヤコブは必死で神にすがって祈りました。

その夜、ヤコブは自分の持ち物の中から兄エサウへの贈り物を選びました。第1の贈り物、第2の贈り物、第3の贈り物と、三重におびただしい贈り物を用意して、順々に兄エサウに届けさせることにしたのです。

まもなくヤコブは川に至りました。ヤボクの渡しです。ヤコブは先に僕たちを渡らせ、家畜などの持ち物を渡らせ、家族も渡らせました。しかし彼は独り後に残りました。進むことができません。恐ろしいのです。ここを渡ってしまえば、エサウが襲いかかってきたら逃げることができない。

ヤコブは神の救いと祝福を求めて、徹夜で祈りました。神と格闘するほどに祈りました。25節以下を読んでみましょう。

「ヤコブは独り後に残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。ところが、その人はヤコブに勝てないともみて、ヤコブの<sup>もも</sup>腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに<sup>もも</sup>腿の関節がはずれた。『もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから』とその人は言ったが、ヤコブは答えた。『いいえ、祝福して下さるまでは離しません。』『お前の名は何というのか』とその人が尋ね、『ヤコブです』と答えると、その人は言った。『お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。』

『どうか、あなたのお名前を教えてください』とヤコブが尋ねると、『どうして、わたしの名を尋ねるのか』と言って、ヤコブをその場で祝福した。ヤコブは、『わたしは顔と顔とを合わせて神を見たのに、なお生きている』と言って、その場所をペヌエル（神の顔）と名付けた。』 32:25-31

次の1節も読みましょう。

「ヤコブがペヌエルを過ぎたとき、太陽は彼の上に昇った。

ヤコブは<sup>もも</sup>腿を痛めて足を引きずっていた。」 32:32

足を引きずって歩くヤコブを朝日が照らしています。

ヤコブは天使と、もっとはっきり言えば神と、夜通し格闘し

て祈ったのです。こうしてヤコブの祈りは聞かれ、神さまから祝福をいただきました。ヤコブは神に守られている確信と平安を得て、ヤボクの渡しを渡りました。

けれどもここで彼はただ確信と平安を与えられただけではありません。ヤコブは、夜を徹しての苦しい祈りをとおして、変えられたのではないのでしょうか。経緯や理由があつたとしても、結局は自分が悪かった。自分が兄エサウをだまして大事なものを奪い取り、傷つけた。ひたすら赦しを求めて兄に会おう。そう決意しました。

歩くのも困難なほどの腿<sup>もも</sup>の痛みを抱えて、彼は足を引きずりながら兄エサウに近づいて行きました。

昨夜はエサウが恐ろしくて後に残っていたヤコブは、今は「先頭に進み出て」(33:3)、エサウに向かって何度も地にひれ伏しました。エサウは走って来てヤコブを迎え、抱き締め、首を抱えて口づけし、一緒に泣きました。こうして 20 年ぶりにヤコブは兄エサウと和解したのです。

ヤコブは夜を徹して祈ったのですが、同じように夜を徹して祈った方をわたしたちは知っています。ゲツセマネのイエスです。

イエスは十字架の死を前にして祈られました。神と格闘して

祈られました。自分の救いのためではなく、人のため、わたしたちの救いのために祈られました。

ヤコブは祈りの格闘をとおして神の祝福を受けたのですが、イエスは、祈りの格闘をとおしてご自分の死を受け入れ、わたしたちのために神の祝福を獲得してくださったのです。

祈ることは空しくありません。神さまが祈りを聞いておられます。「絶えず祈りなさい」と言われたイエスが、わたしたちを絶えず見守り、わたしたちのために祈ってくださいます。

祈ります。

神さま、わたしたちを絶えず祈る者にしてください。諦めずに祈り続ける者にしてください。イエスさまがご自分の命を献げるまでにわたしたちの救いのために祈ってくださったことを無にすることがないようにしてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン